

# 巖谷小波の「梢之月」とキリスト教

兪在真\*

(e-mail: jaejin@korea.ac.kr)

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. キリスト教寓意小説としての「梢之月」
  3. 巖谷小波とキリスト教
  4. キリスト教批判への反証
  5. おわりに
- 

## 1. はじめに

日本児童文学の嚆矢といえる巖谷小波(以下、小波)は、硯友社へ入会した年にキリスト教の洗礼を受けた後、独逸学協会学校基督教徒青年会を設立したり日曜学校の教師をしたりするなど、篤実なキリスト教信者であったが、小波のキリスト教との関わりを論じた研究は意外に少ないのである。そのわけは小波自身がキリスト教との関わりを「語学練習の方便」<sup>1)</sup>と述べ、キリスト教関係の著述が少ないからである。高瀬嘉男がキリスト教児童文学の観点から「巖谷小波をして児童文学の父たらしめたのは、氏が基督信者であったことに因を発している」<sup>2)</sup>と指摘しているが、その根拠といえば、「欧米の文物への親和性を助長し、基督教への間接手引きをしたわけである」というもので、児童文学とキリスト教の関係も小波の洗礼を受けたという事実以上の掘り下げは行っていない。管見の限りでは、中川理恵子・宮崎芳彦の「巖谷小波とキリスト教—新たな小波論の可能性—」<sup>3)</sup>(以下、

---

\* 高麗大学校 助教授、日本近現代文学。

1) 巖谷小波(1913)『小波身の上嘸』宝学館書店 p.81。

2) 高瀬嘉男(1933)「基督教童話各論(第三)」日本童話協会『総合童話大講座(四)宗教童話』日本童話協会出版部 p.2。

3) 中川理恵子・宮崎芳彦(1995)「巖谷小波とキリスト教—新たな小波論の可能性—」富田博之・上笹一郎編『日本のキリスト教児童文学』国土社 pp.115-129。

中川・宮崎論)が唯一小波とキリスト教との関係を詳細に考察した先行研究といえる。中川・宮崎論は、小波がキリスト教へ入信する過程、彼が関わった自由キリスト教の特徴と小波の作家活動におけるこの教派の影響関係を詳細に調査し考察している。しかし、小波とキリスト教との関わりを網羅しているこの論文で小波がキリスト教小説として書いた「梢之月」に関する言及が欠けており、小波におけるキリスト教の問題を実際の作品分析を通しては考察していない。「梢之月」は1889年12月20附の『基督教新聞 付録』に「漣山人訳」として掲載された作品である。掲載されたメディアが『基督教新聞』であるうえに、その内容からもキリスト教を題材にしたと明白に読みとることが可能な作品だが、中川・宮崎論で全く言及されなかったばかりか、管見の限り、先行研究での「梢之月」に関する言及は皆無に等しいのである。

従って本稿では、小波が書いた唯一のキリスト教小説と言える「梢之月」の紹介と、その特徴を考察する。そのうえで、小波のキリスト教への関わりを中川・宮崎の調査を踏まえて、小波の日記と同時代の資料を含めて検討し、「梢之月」との影響関係を検証する。そして、この作品のコンテキストを読み取る作業として同時代のキリスト教言説との関係を考察する。

## 2. キリスト教寓意小説としての「梢之月」

「梢之月」は、『基督教新聞 付録』の一面から二面にわたって掲載された短編小説である。物語は木枯らし吹く或冬の夜、官省に勤める今村兼良が愛妻島村愛子の醜聞を耳にして帰宅するところから始まる。愛子は温順で心優しく、姑との折り合いも良く、夫との仲も睦ましいが、半年ばかり前から近所の細君に誘われて近くの教会に通い始めた。通うにつれ彼女はいつの間にか「真の愛もて人と交はり、口数用ひず行状もて、神の榮を彰はすななど、まことに稀なる信者になり、牧師や伝道師からも大事に思われ、教会の事を色々相談されるまでになった。婦人会の執事を任せられた愛子は、「神の為なれば」と更に骨を惜しむことなく努め、連夜の祈禱会や相談会に出かけるようになるが、教会の伝道師吉元と「道ならず契をなせしと」噂されるようになった。遂には夫の兼良が知人から愛子の醜聞を忠告されるまでに至ったのである。木枯らしの吹くその夜も愛子は、祈禱会に出かけて留守であった。下女から愛子が或男性と山の上の方へ行つたと知らせられた兼良は、早速そちらへ向う。そこで彼が耳にしたのは、自分達は「天に居ます神様の前にハ、露恥づることなく潔白であるが、「神様の前さへ正しければ、此の世のこと何どうならうと、かまはんものでハ決してな」く、濡衣を晴すためにも愛子は婦人会の執事を辞め、夜の祈禱会や教会の仕事も慎むようにと互いに語り合った後、自分達に濡衣を着せた「訳

知らぬ人をつまづかせじと」共に祈禱を捧げる愛子と伝道師の声であった。兼良は「お愛、許してくれ。」と、許しを乞うところで物語は終わる。

「梢之月」は教会の伝道師と女性信徒とのスキャンダルを題材にした小説である。この作品がキリスト教小説であるという根拠は、ただ作品の題材や主人公として教会関係者を登場させているだけでなく、短い作品ながらも随所で聖書の言葉が引用されているからである。

「梢之月」の同時代評として、『女学雑誌』に掲載されたXYZ(内田魯庵と思われる。以下、魯庵)の「○漣山人の「梢之月」」<sup>4)</sup>でも、山の上で二人が共に祈禱を捧げている「これ偏に教のため。訊知らぬ人をつまづかせじと、思ふ心の真実のみ。「我れ」ト云ふ事その間になし。夜風も今は定まれば、心もすみて更に清く、真心こめし祈禱には、などで耳を傾けざらん、天に在す吾等の神！」という箇所を引いて以下のように述べている。

[こ]の一句の如きは実に聖經の文を脳裏に蓄へて出せしものと云ふべし。彼是前書第四章に曰く、

「(上畧) 愛する者よ爾曹を試むる火の如き苦を非常事の如くして爾曹異しとする勿れ、却てキリストの苦に与るを以て歓楽とすべし然れば其榮の顕れん時また爾曹喜び躍らん。若しなんぢらキリストの名の為に謗られれば福なり蓋榮の靈すなはち神の靈なんぢらの上に止れば也 (中略) 若しキリストアンのに因て苦に遇ば羞ること勿れ却て之に縁て神を崇むべし (中略) もし義者辛じて救はるるを得ば神を敬はざる者と罪人は何処に立んや。是故に神の旨に従ひて苦に遇ふものは善を行ひて其靈魂を信ずべき造物者に託すべし」

是れは、基督教徒が常に服膺して確と動かざる教示なり。<sup>5)</sup> (以下、[ ]は引用者注)

上の引用で魯庵が引用しているのは、<ペテロ前書 4:12-19>で、基督教徒であるがために受ける迫害を苦に思わず、善を行い、己れの靈魂を神に託せよという内容の箇所である。魯庵が特にペテロ前書のこの部分を引用したのは、「基督教徒が常に服膺して確と動かざる教示なり」と述べているように、『女学雑誌』の読者となるキリスト教信徒を戒める為であろう。しかし、作中の二人の祈禱は「我れ」の為に捧げられたのではなくて、真相も知らずに自分達について有らぬ醜聞を立てている人たちが却って自分達のせいで信仰上「つまづか」ないようにと、自分たちに濡衣を着せた人たちのために捧げられているのである。すると、下のマタイ伝の方がこの祈禱文の内容に適しているように思われる。

「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ、これ天にいます汝らの父の子と

4) XYZ(1890.1)「○漣山人の「梢之月」」『女学雑誌』p.8。

5) 上掲書。

ならん為なり。(中略) 兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

【マタイ伝 5:43-48 (ルカ伝 6:27-28、32-36)】<sup>6)</sup> (山上の説教)  
(下線は引用者に拠る。以下同。)

上の引用文は、「汝らの仇を愛」せよという『新訳聖書』におけるキリストの最も中心的思想をあらわした一文である。このように、「梢之月」では、随所で聖書の言葉を引用しているので、それらを次に挙げてみる。

引用① はじめの程はどうやら妙なものと、薄気味悪気に思ひ居たるも、沃土に蒔し種なりけん、鳥も啄ます茨も妨げず、次第に聖霊の験力現はれて(「梢之月」)「譬にて数多くのことを語りて言ひたまふ、『視よ、種蒔く者まかんとて出づ。蒔くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。土うすき石地に落ちし種あり、土深からぬによりて速かに萌え出でたれど、日の昇りし時やけて根なき故に枯る。茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ。良き地に落ちし種あり、あるひは百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍の実を結べり。耳ある者は聴くべし』  
【マタイ伝13:3-9、マルコ伝4:1-4、ルカ伝8:4-8】

引用② 只管に云ひふらして、吾は斯くまで信仰深き者ぞと、人に知られん事をつとむ、此等は所謂偽善者の己が前にらつはをふかして、施済をなすものゝ如し。イエスもこれを戒め給ひぬ。 (「梢之月」)  
「汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。然らば、天にいます汝らの父より報いを得じ。さらば施済をなすとき、偽善者が人に崇められんとて会堂や街にて為すごとく、己が前にラッパを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。汝は施済をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。是はその施済の隠れん為なり。さらば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。 【マタイ伝6:1-4】 <山上の説教>

引用③ 真の愛もて人と交はり、口数用ひず行状もて、神の榮を彰はすなんと、まことに稀なる信者なれば、かくてこそ世の塩なれと、牧師伝道師も又なき者に思ひ (「梢之月」)  
「汝らは地の塩なり、塩し効力を失はば、何をもてか之に塩すべき。後は用なし、外にすてられて人に踏まれるのみ。 【マタイ伝5:13、マルコ伝9:50、ルカ伝14:34】  
<山上の説教>

引用④ ……然し此世にある限りは、どこまでも御榮を現はしたく、そればかり始終心に掛けて居ますに、 (「梢之月」)

6) 以下、聖書の引用は、聖書協会連盟(一九一一)『旧新約聖書』出版社未詳による。

「また人は灯火をともして升の下におかず、灯台の上におく。かくて灯火は家にある凡ての物を照すなり。かくのごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行為を見て、天にいます汝らの父を崇めん為なり。」

【マタイ伝5:15-16、マルコ伝9:50、ルカ伝14:35】 <山上の説教>

このように、「梢之月」には『新約聖書』のキリストの言葉や語句が援用されていることが確認できる。特に、引用②、③、④と、魯庵も引いた愛子と伝道師の祈禱の言葉には、キリストの<山上の説教>の言葉が多く引かれているのが特徴的である。愛子と伝道師の二人が語り会い、祈禱を捧げる場面が「山の上」になっているのも、偶然の一致というより、意識的な設定と捉えられよう。また、<山上の説教>の場面でキリストが繰り返し戒めている偽善者が、引用②で作中の偽善的な信者として語られている。なお、<山上の説教>での「敵を愛しなさい」という最も基本となるキリストの教えは、濡衣を着せられている自分達よりも自分達を疑う事でその信仰の妨げや疑心を抱くようになる人の為に祈る伝道師と愛子の行為を通して説かれていることは、前述したとおりである。

また、「梢之月」では、伝道師と愛子の濡衣を「神の子なるイエスすら、謀反人といふ汚名を受けぬ。」というキリストの受難に譬えて語り始めている。愛子が濡衣を掛けられる過程は、教会外部の人からではなく「教会の仲間には、さすがに信ずるものもなきやうなれと、下様なる出入者、下女車夫などか口善悪なく、陰にまはりて云ひ合ふにぞ」と、信徒たちは最初は信じなかったが、教会に出入りする者から噂が広まり、「今では教会の人までも、妙な考を持やうになり」と、信者までもが疑いを持ち、ついには愛子の真心を疑ってはならぬ夫と姑までが噂を信じるようになったという設定になっている。これは、キリストが同じユダヤ人の祭司達に謀られ、ユダヤの民と弟子達の裏切りに遭う受難の過程と類似していると言えるだろう。そして、十字架につけられたキリストの「父よ、彼らをお赦してください。」(ルカ伝23:34)という叫びに呼応するかのように愛子の潔白と真心を知った夫兼良が物語の最後に発する言葉も「お愛許してくれ！」と、許しを乞う言葉で締めくくられているのである。

以上、見てきたように「梢之月」は、キリスト教信徒のスキャンダルを物語を通して真の信徒の有様とキリストの教えを伝える寓意小説として読むことができる。

### 3. 巖谷小波とキリスト教

小波がキリスト教と関わりを持つようになったのは、1885年、独逸学協会学校へ入学<sup>7)</sup>

7) 「父は小波を医師にしようと八歳のころ松野クララ夫人についてドイツ語を学ばせ、一四歳医学予備校、一六歳独逸語協会学校に転じ」(福田清人「巖谷小波」日本近代文学館・小田切進編(1977)『日本近代文学大事典』第1巻、講談社、p.185)

てからである。小波がはじめて教会に行ったのは、硯友社へ入会した一ヶ月後の1887年2月であり<sup>8)</sup>、同年6月、番町教会で小崎弘道牧師より洗礼を受けた<sup>9)</sup>。その後、小波は足繁く教会に通い、1888年6月には仲間たちと独逸学協会学校基督教徒青年会を設立<sup>10)</sup>、内村鑑三を演説に招く<sup>11)</sup>など活発な活動をしていた。小波は独逸学協会学校の教師より新教神学校への進学を奨められた<sup>12)</sup>が、9月独逸学協会学校普通科を卒業した後、同校の専修科へ進学、法律・経済の勉強をした<sup>13)</sup>。だが、文学の道に進みたいという気持が強く、初の単行本『初紅葉』が出版された1889年4月に専修科を退学<sup>14)</sup>、作家になる決心をつけた。独逸学協会学校退学後も文学の方に比重を移してはいはいたが、1889年6月より安息日学校の教員を務め、『六合雑誌』<sup>15)</sup>に「ゴエター伝」を連載したりと、宗教活動と文学活動を併行して行っていた。本稿で取り上げた「梢之月」もこのように活発に宗教活動をしていた時期に書かれた作品である<sup>16)</sup>。

「梢之月」執筆後のキリスト教との関わりを中川・宮崎論によって辿ってみると次のようである。1891年「教育勅語」発布に伴う保守的なナショナリズムの高まりや内村鑑三の「不敬事件」などを受けてドイツ系宣教師や教師たちが次々に帰国したため、小波の属していた普及福音系の教会は日本人の手に委ねられた。こうしたなか番町教会の小崎牧師が退任し、金森通倫が新牧師として着任した。金森は新神学支持者のなかでも急進派に属

- 8) 「十一日 (中略) 夕刻副島氏来り番町教会へ行かんかト云ふ あとから行くと答ふ 氏先ツ帰る (中略) 氏等ト教会へ赴ク 生憎ヘーリング欠席」(巖谷小波「丁亥日録」瀬沼茂樹編(1968)『巖谷小波・川上眉山集』明治文学全集20、筑摩書房 p.251)
- 9) 「十九日 晴 早朝山城町ヨリ帰り食後[番町]教会へ行ク 今日聖バプテスマヲ受ク小崎牧師ヨリ (他十五人アリ)」(前掲書、p.261)
- 10) 「十九日 (中略) 一時ヨリ合併教場にて学生基督教徒青年会設立相談アリキ」(巖谷小波「戊子日録」前掲書、p.286)
- 11) 「卅日 (中略) 青年舎へ行キ二時ヨリ皆共ニ教会へ行ク 青年会演説農学学士内村鑑三氏也」(前掲書、p.287)
- 12) 「十四日 (中略) 三時辞し上車ヘーリング師ヲ訪フ 卒業後ノ方向ヲ定メンガ為也 師ハ新教神学校ニ行カンコトヲ進メル」(前掲書、p.290)
- 13) 「十九日 晴雲 今朝上車杉浦[重剛]先生ヲ訪ヒ相談専修科行きに定る」(前掲書、p.290)
- 14) 「廿九日 (中略) それヨリ学校へ行き退校願ヲ出し月謝ヲ収メ書籍を返ス」(巖谷小波「己丑日録」前掲書、p.306)
- 15) 『六合雑誌』(1880.10~1921.2)は、キリスト教主義の総合雑誌。小崎弘道、田村直臣、植村正久らにより東京基督教徒青年会から創刊。キリスト教主義に立って宗教、神学上の諸問題を論じ、あわせて学術、教育、文学、社会、政治の全般にわたる啓蒙的評論を掲載し、その清新な立場は広く読書界の歓迎を受けた。(川合道雄「六合雑誌」日本近代文学館・小田切進編(1977)『日本近代文学大事典』第5巻、講談社、p.447)
- 16) 「十六日 晴 今朝十時帰塾 午前梢之月草す 夜塾主来  
十七日 晴 梢之月清書 十二時独逸協会学校により高階を誘ひ共に弥石へ行 (中略)  
廿二日 晴 午前八時出て教会、午後一時より又教会(中略) [梢之月不知庵二送ル] (巖谷小波「己丑日録」前掲書、p.321)

し、彼の神学・伝導上の方針について教会員の中で賛否両論が生じたため、番町教会は分裂の危機を迎えた。金森は分裂を恐れ辞表を提出し、金森を支持していた小波も教会に退会届けを出したのである<sup>17)</sup>。こうして明確な主張を持って、教会を退会した小波であったが、1892年2月に上梓した『当世少年気質』（春陽堂）の第四編「負けるが勝ち」に「なんじの仇敵を愛しめ」と副題をつけて聖書の教えに従う少年を描いていたことがらも、彼が棄教したのではないことが窺える。

以上、概観したように小波のキリスト教との関わりは、主に独逸学協会学校と番町教会によるものである。以下、独逸学協会学校と番町教会が属していた自由キリスト教教派の特徴を中川・宮崎論により、概観してみる。

独逸学協会学校の特徴は第一に、1881年の秋に設立した独逸学協会の実際運動の一つとして設立されたものであったということだ。学校の母体である独逸学協会は、当時勃興してきた民権思想、つまり、フランスや英米からその言語と共に輸入された自由民権主義に対し、ドイツ語及びドイツの政治、経済、法律に関する国家主義を研究主張することを目的としていた。協会の設立には政治家の平田東助、品川弥次郎、桂太郎が協力し、その頭目は伊藤博文であった。

第二の特徴は、当時有力であった三つの学校—三田(慶応)、早稲田(早稲田専門学校)、江戸川(同人社)—では英語を教え、共に私学の特徴を活かして官学あるいは官僚を排斥していたのに対し、独逸学協会学校は、ドイツ語を教え、官僚養成を目的としていたことである。

さらに、独逸学協会学校の特色としては、イエナ大学出身のヘーリングと、宣教師として来日していたスピネルの二人の存在が挙げられ、この二人は互いに助け合い、特にヘーリングは、スピネルの布教活動に協力を惜しまなかったそうである。

このような環境により、小波は独逸学協会学校に通ううちに、自然とキリスト教に触れることになったのである。スピネルは、学校で歴史を教える傍ら、1886年の春より自宅で、ドイツ語を解する青年学徒にキリスト教を系統的に講義しはじめた。独逸学協会学校の生徒たちが中心に集まり、講義のあとで洗礼を受けるものもいた。小波もこの講義を聞きに通った一人である。1886年11月に番町教会ができると、この外国人教師たちは、そこでも説教や講演を行うようになり、小波もこの教会に出入りするようになったそうである。

このように小波が通っていた当時の番町教会は、スピネルが創立した普及福音新教伝導会の伝道場であった。同じく中川・宮崎論より番町教会の特徴を概観してみる。

普及福音新教伝導会は、1884年福音の宣教を超教派的に行うべきであると主張するスイスの牧師ブースを会長に、ドイツのヴァイマールにおいて結成された。ベルリンに留学中であった和田垣謙三の要請により日本を第一伝道区と決定し、1885年最初の宣教師とし

17) 「廿六日（中略）十時頃教会へ行く 小崎氏説教後總會、金森氏辞職の件自説容れられず半途にして去ル（中略）[教会へ退会書差出ス]」（巖谷小波「辛卯日録」前掲書、p.348）

て、創立者の一人であるスピネルが来日した。小波が接したキリスト教は、ヨーロッパにおいても、極めて新しい宗派であったのである。小波が通っていた番町教会は、和田垣謙三が、三好退蔵(当時司法次官)一やはりドイツ留学中に入信し、以前よりスピネルを自宅に招いて講義を受けていた一とともに小崎弘通を牧師に押し、1886年に番町講義所を開き、会堂建設に至ったものである。

普及福音新教伝導会は、ユニヴァーサリスト、ユニテリアンとともに、〈自由キリスト教〉と称される宗派であり、宗教上の基本的な特色は以下ようになる。

普及福音新教伝道会の主義方針は、教会権威からの解放を求めるもので、独自の教会を組織しようとする一つの特徴としていた。しかしながら、内村鑑三の唱えた無教会主義とは異なり、教会や教義の深い意義を認めるといものであったため、もともと教会も教義もほとんどなかった当時の日本においては、まず宣教師たちの主義と信仰を伝え、門下生を養成することからはじめる必要があった。そこでもっとも好都合であったのは日本におけるドイツ学の勃興と独逸学協会学校の存在であり、スピネルはここを拠点として伝道活動を進めたのである。この伝道会は、宣教師たちに学究の徒が多く、聖書と教理の歴史、批判的な解釈を行い、キリストの示した教訓や彼の人格と生活に直接教えを求めた。

また、キリスト教と学術、政教の調和という考えをもっていたため、日本におけるキリスト教は、日本の歴史及び国民的、文化的特色を踏まえて作り上げるべきであるとし、仏教からキリスト教へという改宗も問わなかった。キリストの精神が伝道地の国民精神に感化を与えることの方がより重要だと認識していたからであるそうだ。

例えば、明治24年の『読売新聞』では、この宗派を次のように紹介している。

○日本に於ける自由主義基督教 進化発達ハ宇宙の大法なり物質界のもの駸々乎として発達す精神界亦た其の法則の中にあり 近時欧米諸国に於ける自由主義基督教ハ其の勢力甚だ大にして文明の進歩精神界万般の進歩と共に各般の旧物を撃碎し盲信迷信を打破するに至れり従つて我国に於ける基督教中にも自由新神学の風潮頗る強大にして保守的教会の本城たる某々教会に於ても隠然一大革新を見んとするに至りたる由なるが今試みに我国に於ける自由基督教の三派に就き其の重なる勢力を表示すれば大畧左の如くなるべしと云ふ

普及福音教 〔渡来の年——明治十八年

| 機関 〔教会二ヶ所(信徒二百人)

| | 神学校一ヶ所(生徒六名)

| | 雑誌二種 〔福音会叢書(廃刊)

| | 真理(十五号まで発兌)

〔伝道者 〔外国人一スピネル、シミューデル、ムンチンゲル

〔日本人一三並良、丸山通一<sup>18)</sup>

上の記事では、自由キリスト教の三派一普及福音教、ユニテリアン教、ユニバーサリスト教一を紹介していたが、普及福音教以外は引用を省略した。自由キリスト教の教会の権威や原理主義に陥らずに、日本の歴史や国民性、文化的特色を踏まえながらの伝道が1891年頃には広く世間に知られていた事が上の記事から窺える。また、他の記事を通してこの宗派がどのように認識されていたのかを見してみる。

然るに日本に於ける基督教伝道ハ豪も是等の点[外国に宗教を移植する時に生じる問題点]に注意せざりものゝ如し、故に第一に受くる所の攻撃ハ国体と矛盾する所ある事これなり、日本の人情風俗に適せざることこれなり、(中略)而してその伝道の方法ハ極めて狭隘なる定規の中にたてたるを以て、信者ハ概して其大本を攻めずして枝葉のみに孜々とし、終に因循不活発の厭世的人物を造り出すの傾なしとせず、(中略)果して然らバ日本の基督教が今日に執るべきの方針ハ其教理を学理的に説明して万人に承認せしむるにあり、其伝道を改めて日本の人情国風に適合せしむるにあり、現に自由派の基督教なるものハ力めて此方針を執りつゝあるにも関はず、彼の固執派と称する一体ハ頻りに之を排斥し、其反動として却つて益々内城退縮せんとするが如き傾なしとせず<sup>19)</sup>

スピネル氏ハ日本に於ける自由派基督教の開山なる(中略)元來基督教の教理ハ一見最も解し易きが如くなるも其の実頗る誤解を來たし易く為に門外漢ハ勿論の事既に堂に入るの人にして尚ほ能く其真味を知るもの稀なり スピネル氏が此書[『基督教約説』]を著すや最も進歩したる神学上哲学上の真理を以て基礎となし勉めて日本人の思想知識の傾向を察し最も能く其の耳に入り易からんことを期し<sup>20)</sup>

上の最初の引用文は、日本における種々の宗教を紹介しながら、キリスト教を批判的に論じている記事である。ここでキリスト教の浸透を妨げている原因として挙げているのが、日本の「国体と矛盾」している点、「日本の人情風俗に適」しない点である。そして伝道方法もとても厳格な教理を求めるために、大概の人がその真意を理解することができず、「終に因循不活発の厭世的人物を造り出す」に至ると批判している。これらの問題点を改善するためには「其教理を学理的に説明して万人に承認せしむるにあり、其伝道を改めて日本の人情国風に適合せしむるにあ」とし、「現に自由派の基督教なるものハ力めて此方針を執りつゝある」と、評価している。このように、自由キリスト教は、キリスト教の教理を平易に日本の状況や文化に合わせて伝道している点で特に広まり得たのである。この点は、二番目の引用文であるスピネルの著書を紹介している記事でも、彼が「勉めて日

18) (1891.1.7.)「○日本に於ける自由主義基督教」『読売新聞』朝刊2面。

19) 伊藤蘇水稿(1891.7.19)「日本の宗教 下(続)」『読売新聞』朝刊1面。

20) S.T(1892.2.23)「批評○基督教約説(博士スピネル氏著)」『読売新聞』付録1面。

本人の思想知識の傾向を察し最も能く其の耳に入り易からんことを期し」ている点を評価しているところからも窺える。

このように、小波が支持していた自由キリスト教は、教理だけを固執せずに伝道のためには宗教以外の学術や政治と調和を取るという特徴を持ち、日本においても日本の状況や文化と衝突せずに受け入れられるよう、その教理を平易に伝えることに努めていたのである。自由キリスト教のこのような特徴ゆえに、小波は文学活動と教会活動を何ら衝突なく併行して行えたのである。小波の例は、中川・宮崎論も指摘しているように、同時代のキリスト教文学者とは異なる趣きがある。例えば、小波からは同時代の北村透谷の悩み「キリスト教の洗礼を受け、フレンド派に属していながら、しかも他方でも西行さんとあだ名されるほどに古い日本の詩人とその生活態度に心をひかれていた透谷が、自ら文化綜合を引き裂き、且つ自分自身を引き裂いて自殺にまで駆りやられた」<sup>21)</sup>—や、島崎藤村の葛藤「青年時代に心に戦った宗教と芸術のささやかな相克」<sup>22)</sup>—は、見られない。それは、透谷や藤村の信じた英米派のキリスト教と小波の信じた自由キリスト教との差異に起因するものであると言える。

「梢之月」で愛子は、神の為、教会の為に一所懸命に働いたことで却って有らぬ濡衣を着せられた。愛子が「元より妾共は潔白な身の上、此の世の人にハ彼是云ハれても、天に居ます神様の前にハ、露恥づること」がないと伝道師に訴えると、伝道師は「神様の前さへ正しければ、此の世のことハどうなうと、かまはんものでは決してないので。此世にある限りハ、やはり此世に賞められるやう、神の榮へを現はすやうにするのが、吾々の務めであるのですから、私共ハ何処までも、この濡衣を晴さなければなりません。」と答えながら、教会の仕事はもう辞め、夜遅くの祈祷会も慎むように諭している。すなわち、神や教会の為の宗教活動であるならば、世の人々に理解されなくても貫くべきであるという保守且原則的な態度を否定している。「此の世」に理解されない信仰生活を貫くのではなく、「此世にある限りハ、やはり此世に賞められるやう」折り合いをつけないと、「此の世」に「神の榮へを現はす」ことができないという考え方である。ここでの「此の世」を日本に置き換えたなら、教会や教理に固執せずに日本の風土や文化と調和しながらの伝道に重きを置いた自由キリスト教の特徴と同じであることが分かる。

このように小波におけるキリスト教、特に自由キリスト教の影響が「梢之月」から明確に読み取ることができる。そして、この作品の主題提示の単純明快さと、キリストの教えを物語を通して伝えようとする寓意小説の特徴も、また自由キリスト教の一伝道する教理を平易に、受容する側に受容れ易くするところ—の裏付けであると思われる。自由キリスト教に裏付けられている「梢之月」の平易さ、寓意性が以後、小波が進む児童文学へ方向に影

21) 久山康(1956)『近代日本とキリスト教』基督教徒兄弟団、p.160。

22) 上掲書、p.154。

響したかについては、更なる考察が必要であるため、本稿では判断を留保するが、少なからずの影響があっただろうと推測する次第である。

#### 4. キリスト教批判への反証

以上、見てきたように「梢之月」には自由キリスト教の影響が多分に見られるが、その他にもこの作品からは明治20年代初期のキリスト教に関する批判的言説も読み取ることができる。小波がキリスト教の「通弊」に意識的であったことは、「梢之月」を発表してから2年後の1891年に発表した「近時の基督教小説を見て所感を陳ぶ」という批評から窺うことができる。

余ハ其の[金森通倫の『日本現今の基督教並将来の基督教』出版]際も驥尾に就いて、日本現今基督教会の、一即ち信徒社会の通弊をも論破し、聊か警醒する処あらんと企てたり。然れども是余輩が出で、喋々すべき幕にあらずと思惟し、且つハ二三知人の忠告もありしかバ、遂に其俛にして黙したりしが。余と同感の人の随分多きにも係らず、教会内部の通弊ハ、遂に摘発せられずして止みぬ。(改行)然るに豈図らんや、此頃文壇に現はれたる二個の短編小説の、傍若無人にも教会内部の通弊一而も余輩の未だ認め得ざりし醜事の暴露しあらんとハ。其一を柵山人が「めつき牧師」となし、他を松華庵主人の「ひつじかひ」と為す。而して共に是牧師の醜聞を記せるものなり。23)

引用箇所は小波が自由主義的な新神学的立場からキリスト教と文化一般また他宗教との融和を強調した金森通倫の『日本現今の基督教並将来の基督教』を読んでから、自分も「信徒社会の通弊」、「教会内部の通弊」を論破しようとして止めたが、この度柵山人の「めつき牧師」と松華庵主人の「ひつじかひ」が共に「傍若無人にも」それを暴いているという冒頭の部分である。上の引用文が発表されたのは、「梢之月」発表から二年後であるが、小波が信徒社会や教会内部の「通弊」に意識的であったことが確認できる。また、「梢之月」が当時一般にはまだ新しい文化であったキリスト教や信徒に対する批判が横行していた時期に出された作品であったことが同時代評からも確認できる。

漣山人は実に基督教の命ずる処に頼り、ヒポクリットがいまはしき風説も虚に乗せんとするサタンが暴力も道徳の堅塁を侵しがたき活例を写したるなり。神の恵みに浴する信心無二の兄弟姉妹は此一編を読み、かの「くされ玉子」著者の意を悟らで基督教攻撃の好

23) 漣山人(1891.11.6)「批評○近時の基督教小説を見て所感を陳ぶ」『読売新聞』付録1面。

材料と心得たる悪魔の敗じくを見たる心地して、更に神の恵みを感謝すべし。24)

これは、前述したXYZ(魯庵)の同時代評であるが、「梢之月」より10ヶ月前に発表された嵯峨の屋おむろの「くされ玉子」の本意―「悪を写して信者を反省せしめ」―を悟らず、キリスト教攻撃の好材料を得たと思っていた批評家もこの「梢之月」を読んで深く恥じ入ったであろうという内容である。この引用文からも当時「基督教攻撃」があったこと、「梢之月」がそのような文脈の中で読まれていたことが確認できる。

魯庵がここで「梢之月」と比較している「くされ玉子」は、嵯峨の屋おむろが1889年2月『都の花』に発表した短編小説である。その概要は次のようになる。女主人公松村文子は女学校の教師で、熱心な耶蘇教信者と自称しているが、内実は勤先の学校の校主の息子宮川と性的関係を結んでいるほか、宮川の甥の少年晋を誘惑してこれとも関係を結ぶという多淫の女であり、晋と同衾の場面に宮川に発見されたために彼らの関係は破局に達する。憤激した宮川があり合わせた鶏卵を晋の顔へ投げつけると、「黄み汁べつたり貌は狼籍、鶏卵は腐つてありし者か、鼻持ならぬ悪臭汚穢、晋は其処へ打倒される。」その時の宮川の「くゝくさつてらア、腐敗鶏卵め。」という言葉が題名のよるところである。文子はその後、「宮川よりは白眼、学校よりは背中に塩、知人からは爪はじき」にあひ、身には父なし子を宿して途方に暮れるという後日談がついている。

文末の「嗚呼腐敗玉子、然り真にくされ玉子なり。伏したる者も、倒れたる者も、将亦罵る者も共に腐れり。彼等は皮相より見る時は頗る美しきものにして腐れざる鶏卵と異ならねど、一たび其皮を破り其内を窺へば一身唯是腐敗の塊……悲哉聖者の遺教さへ、輕薄者流の玩具となる今の世の中、嗚呼案じらるゝ世の行末……」から作者の文明批評的意図が明確に窺える作品である25)。

「くされ玉子」と「梢之月」が共に当時のキリスト教徒の醜態を題材にしているところをまず検討してみる。両作品は共に偽善的な信者と当時としては新しい西洋文化であるキリスト教を信じているというだけで持ち得た優越心を批判している。例えば、「梢之月」では以下のような語りがそうである。

総て女は心浅墓なれば、少しばかりのもの知りたるも、それを誇りたがるか常なり。謙遜を旨とする基督教信者か中にも、折ふしは斯様な婦人ありて、妾は教を聞そめてより、更に罪を犯せし事なし、妾は安息日に教会に出てぬ事なし、妾は幾人道を伝へたり、妾は神の爲ならハ、宝も惜します投つべしなど、只管に云ひふらして、吾は斯くまで信仰深き者ぞと、人に知られん事をつとむ、此等は所謂偽善者の己が前にらつはをふかして、施済をなすものゝ如し。

24) XYZ(1890)、前掲書。

25) 笹淵友一(1974)「解説」『近代日本キリスト教文学全集』1、教文館。

ここでは、自分が如何に篤実な信者であるかを言い触らしている信徒を批判しながら、ヒロインである愛子がそのような偽善的な外面だけの信徒でないことを対照的に浮彫りにさせている。一方「くされ玉子」のヒロイン文子はまさに「梢之月」で批判している偽善的信徒の典型として描かれている。

扱又此婦人は宮川の父の立てたる女学校の教師といふ事、熱心なる耶蘇教信者といふ事、耶蘇教の宗旨の事、是等の事が話の種にて、談笑凡そ一時間。(中略)

「さうさ、感心する程でもないのねえ、知ツている事ばかりです。如何も博士の議論だとは思へませんツ、如何して貴君。一体人間は汚れた罪のある心を以て、世の中に生まれたんですものを、神の恵みでなけりやア、幸になれますものか。」(中略)

「おや、不思議さうな顔して、厭ひ？え、私の所では飲まないの。何ですと私にすまないツて。何故、宗教家だから？宗教家だツても私は飲むのさ。無論管はないのさ、お酒を禁ずるのは儀式上の事でも、儀式も無学の者には入要ですけれど、道理を知ツてる者には要りやアしません。」(中略)

「日本の男女の様に真実といふものは、薬にたくも少もなく、厭ならおよし他にあるからといふ様な浮気一三味の恋で、寄ると触ると一所になりツこでは、実に困りますねエ、其といふが畢竟無宗教だからですよ。神の教なんといふと、頭からかつけなして相手にしないんですもの、道徳が地に払ツてないからですよ。其も宜が、自分たちが左様なものですから、其を標準にして人の事を兎や角と云のんですもの、失敬ぢやありませんか。私の事などは妙な事を言ツてますとき、貴君と怪しいツて、真成に人を馬鹿にした、私は此様拳主義ですが、是でも神の教は奉じてますからねエ、いやに外部を飾ツて内々醜行を極めてる利口な人とは違ますからネ (中略) / 「何とでも言ふなら言はせて置くさ、人は何と言はふと自分さへ正しければ良心に恥づる事はないさ、良心に恥づる事さへなければ其で宜さ、さア飲う飲う」

「くされ玉子」の女主人公は、非信者を「無学の徒」と蔑視し、キリスト教を「新主義」であるとキリスト教徒としての優越感を露骨に述べる女性である。しかし、口では神を説きながら飲酒も二人の男との浮気をも辞さない偽善的な信徒なのである。そして、引用文の末尾にあるように、醜聞について世間はどう云われようと、「良心」—「梢之月」では「神」—に恥じなければ良いとしている。「梢之月」では前述したように、濡衣を解こうと務め、キリスト教徒というのは、神の前のみでなく世に対しても善であるのが真の姿であるということが小波の強調している部分であり、世俗と折衷しているところは自由キリスト教派の影響であろう。しかし、「くされ玉子」では、キリスト教徒としての内なる「良心」に恥じなければ、世間の道徳に縛られることなく、勝手気ままに振るうことが却って「新主義」であるとされている。「くされ玉子」が当時の知識人や彼らが振り翳す文明を批判的に描いている作品であった事を踏まえると、当時の似非キリスト教徒たちが如何にキリスト教の教

理を歪曲し、それがキリスト教批判の要因となっていたのかが窺える。

また、両作品共に教会での男女の醜聞を題材に取り上げているが、明治初期教会は新しい男女交際の場であった。1887年6月から翌年の2月まで『我楽多文庫』に連載された小波の小説「真如の月」は、教会に通う若い男女を主人公にした恋愛小説であり、中川・宮崎論も指摘しているように、「一六、七歳の彼[小波]にとって教会は楽しい男女交際の場でもあ」ったのである。大浜徹也は、教会が「西洋文明を象徴するものとみなされ、ハイカラな場所として訪れるものが跡をたたなかった。中でも都市教会のサロン化は著しかった」<sup>26)</sup>と指摘し、1881年7月、大阪心斎橋「綿喜」が定価四銭で売り出した番付「耶蘇退治馬鹿のしんにう」を紹介している。

耶蘇を信ぜねバ不開化という奴（東前頭二十二枚目）

耶蘇を信じてやたらにをどる奴（西前頭二十五枚目）

耶蘇の婚礼式をする奴（西前頭六枚目）

また、都市教会が社会上流の人士によって構成されていくなかで醸し出された雰囲気がつぎのような演歌に歌い込まれていた。

博愛仁義の道を説く、基督教者の集まりも 男女同権飛び越えて 結婚自由の見合い場所  
松の緑に比較べき 清き操も打忘れ 親の許さぬいたづらに 恥る少女の行末は  
思ひやるだに長大息<sup>27)</sup>

「梢之月」は伝道師と女性信徒との醜聞であるが、小波が1891年の批評で取り上げていた「ひつき牧師」と「ひつじかひ」は「梢之月」と同じく牧師と女性信徒とのスキャンダルを題材にした小説である。このように、当時教会やキリスト教徒の墮落についての批判が取りざたにされていた事実を踏まえると、「梢之月」は、これらの批判に対して一つの反証として読まれる事を欲したのではないだろうか。そして、まさに同時代評の魯庵がその点を見事に指摘していたように思われるのである。

## 5. おわりに

以上、小波の唯一のキリスト教小説と言える「梢之月」を中心に、作品の特徴と小波におけるキリスト教の問題、そして「梢之月」の同時代キリスト教に関する言説との関わりを見てきた。この作品の特徴は、何より愛子というヒロインの造型と愛子と伝道師の醜聞を取り

26) 大浜徹也(1979)『明治キリスト教会史の研究』、吉川弘文館。

27) 添田知道(1963)『演歌の明治大正史』、岩波書店。

まく彼らの態度を通してキリストの教えを寓意的に伝えている作品である。そして、そこには、当時小波の関わっていた自由キリスト教宗派の特徴が見受けられる。英米系の宗派とは異なり、教会や教理に固執するのではなく、布教を宗教以外の事柄との調和のうえで行うことを特徴として点が小波の当時の文学と宗教活動との衝突なき平行や作品の内部からも窺えた。また、この作品が書かれていた当時には、キリスト教は一般的にまだ新しい宗教であったため似非信者が多く、彼らを含めてのキリスト教への批判がなされており、「梢之月」はそれらの批判に対する反証として読まれる作品である。

「梢之月」は『基督新聞』に掲載された際、「漣山人訳」となっていたが、たぶん小波のほぼ創作に近い翻案か、或は創作であろうと思われる。しかし、「訳」とある以上、原作が全くないとも断言できない。それと言うのも、明治20年代、日本ではフランスの写実主義作家エミール・ゾラに関する様々な情報や作品が紹介され、硯友社の作家達もその英訳本を読んでいたという。大西忠雄によると、「紅葉は其の頃[1887年]ゾラの『ムーレ司祭の誤ち』を英訳版で読んでいた(中略)紅葉のゾラへの傾倒ぶりは、右述の『ムーレ司祭の誤ち』を翻案して、『恋の山賊』(明治22.10)を書いている所からも窺われる」<sup>28)</sup>そうである。例えば「梢之月」が発表された1889年だけに限って硯友社やその周辺の作家達が翻案した作品をみても、5月に内田魯庵がゾラの『居酒屋』を翻案して「酒鬼」(『女学雑誌』)を、7月に山田美妙が『ナナ』を翻案した「いちご姫」(『都の花』)を、10月に尾崎紅葉が『ムーレ司祭の誤ち』を翻案して「恋の山賊」(『文庫』)を発表している。「ムーレ司祭の誤ち」は、敬虔で誠実な神父セルジュ・ムーレが野性的な少女アルビーヌとの自然な男女間の愛情を分かち合った後、自らの罪を悔い、元の禁欲的な生活に戻るが、彼に捨てられたアルビーヌはお腹の中に彼の子を宿したまま自殺するという、神父のスクन्दルを題材にした小説である。もちろん、「梢之月」と「ムーレ司祭の誤ち」を比べると聖職者のスクन्दルという題材以外に類似している点はないが、小波周辺の作家達が当時ゾラに傾倒し、相次いで翻案作を書いていた状況から、小波もゾラの「ムーレ司祭の誤ち」を知っていた可能性は大きい。そして、翻訳の概念がまだ曖昧であった当時としては、題材を借りてきただけの「訳」も考えられるのである。

現段階では、小波におけるゾラ受容は更なる考察が必要であろうが、「梢之月」という一編の短編小説が、自由キリスト教、当時のキリスト教やその信徒への批判、そして、硯友社仲間のゾラ受容という様々な要因によって生まれてきた作品であることは、確かに言えると思われる。

28)大西忠雄(1974)「ゾラ」『欧米作家と日本近代文学 フランス編』教育出版センター、p.145。

## 【参考文献】

- 伊藤蘇水稿(1891.7.19.)「日本の宗教 下(続)」『読売新聞』朝刊1面。
- 巖谷小波(1913)『小波身の上嘸』宝学館書店 p.81。
- 巖谷小波(1887)「丁亥日録」瀬沼茂樹編(1968)『巖谷小波・川上眉山集』明治文学全集20、筑摩書房 p.251。
- 巖谷小波(1888)「戊子日録」瀬沼茂樹編『巖谷小波・川上眉山集』明治文学全集20、筑摩書房 p.286。
- 巖谷小波(1889)「己丑日録」瀬沼茂樹編『巖谷小波・川上眉山集』明治文学全集20、筑摩書房 p.306、321。
- 巖谷小波(1891)「辛卯日録」瀬沼茂樹編『巖谷小波・川上眉山集』明治文学全集20、筑摩書房 p.348。
- 巖谷小波(1891.11.6.)「批評○近時の基督教小説を見て所感を陳ぶ」『読売新聞』付録1面。
- 大西忠雄(1974)「ゾラ」『欧米作家と日本近代文学 フランス編』教育出版センター、p.145。
- 大浜徹也(1979)『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館。
- 川合道雄(1977)「六合雑誌」日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』第5巻 講談社、p.447。
- 聖書協会連盟(19-- )『旧新約聖書』出版社未。
- 笹淵友一(1974)「解説」『近代日本キリスト教文学全集』1 教文館。
- 添田知道(1963)『演歌の明治大正史』岩波書店。
- 高瀬嘉男(1933)「基督教童話各論(第三)」日本童話協会『総合童話大講座(四)宗教童話』日本童話協会出版部 p.2。
- 中川理恵子・宮崎芳彦(1995)「巖谷小波とキリスト教—新たな小波論の可能性—」富田博之・上笙一郎編『日本のキリスト教児童文学』国土社 pp.115-129。
- 久山康(1956)『近代日本とキリスト教』基督教学徒兄弟団、p.160。
- 福田清人(1977)「巖谷小波」日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』第1巻、講談社、p.185。
- 無記名(1891.1.7.)「○日本に於ける自由主義基督教」『読売新聞』朝刊2面。
- S.T(1892.2.23.)「批評○基督教約説(博士スピネル氏著)」『読売新聞』付録1面。
- XYZ(1890.1)「○漣山人の「梢之月」」『女学雑誌』p.8。

## 要 旨

本稿では日本児童文学の嚆矢といえる巖谷小波がの『基督教新聞 付録』(1889年12月20日附)に発表した「梢之月」を巖谷小波におけるキリスト教受容、同時代のキリスト教文学、作中の聖書の言葉などを中心に考察した。この作品は従来の巖谷小波の先行研究では言及すらされてこなかった作品であるが、小波の初期文学におけるキリスト教受容を克明にみせてくれている。

「梢之月」はキリスト教信徒のスキャンダルという素材を通して真の信徒の有り様とキリストの教えを伝える寓意小説として読める作品である。ここには、当時小波が関係していた自由キリスト教宗派の特徴が大きく影響していたと見られる。自由キリスト教は英米系の宗派とは異なり、教会や教理に固執せず、キリスト教と日本の文化と調和に重点をおいた布教活動が特徴的であるが、宗教との間で何ら葛藤を感じなかった小波の文学活動や「梢之月」の作品内容からもその特徴が窺えた。この作品が発表された時代にキリスト教は一般的にまだ新しい宗教であったため似非信者が多く、彼らを含めてのキリスト教への批判が往々になされており、「梢之月」はそれらの批判に対する反証としても読まれる作品であった。この作品の主題提示の単純明快さと、キリストの教えを物語を通して伝えようとする寓意小説の特徴も、また自由キリスト教の一伝道する教理を平易に、受容する側に受容れ易くするところ—の裏付けであると言える。

「梢之月」は「漣山人訳」となっているが、これは、硯友社の作家達が当時エミール・ゾラに傾倒し、相次いで翻案作を出していた状況から、小波もゾラの「ムーレ司祭の誤ち」を知っていた可能性は大きく、翻訳の概念がまだ曖昧であった当時としては、題材を借りてきただけの「訳」も考えられる。

以上、小波の「梢之月」という一編の短編小説は、自由キリスト教、当時のキリスト教やその信徒への批判、そして、硯友社のゾラ受容という様々な要因によって生まれてきた作品であったことを確認した。

キーワード：巖谷小波、「梢之月」、キリスト教、普及福音新教伝道会、「くされ玉子」

투 고 : 2011. 8. 31  
1차 심사 : 2011. 9. 10  
2차 심사 : 2011. 10. 1